

開催地名：沖縄県読谷村	
開催日時	令和元年 11 月 13 日（水） 19:30 ～ 21:00
開催場所	読谷村文化センター
語り部	奥寺 啓蔵 （岩手県遠野市）
参加者	自主防災組織、自治会、消防団等 約 120 名
開催経緯	<p>昨今、内陸部地域においては、自主防災組織の結成が課題となっている。結成に向けて、内陸部の後方支援の役割について学び、自主防災会の必要性について認識していく必要がある。また、近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識が低く、既存組織の育成強化が求められていることから、今回東日本大震災の語り部による講演会を開催し、これらの課題に対して取り組んでいく手立てとしたい。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>私は昭和 50 年に遠野市役所に入所し、複数の部署に勤務してきた。東日本大震災発生時は、遠野市消防本部の消防長として市内の災害対応、その後、沿岸被災地の後方支援活動に対応した。本日は、東日本大震災について、体験をもとにお話ししたい。</p> <p>平成 23 年 3 月 11 日、14 時 46 分に発生した大規模な地震により、東北の太平洋側は津波による大きな被害を受けた。津波の高さは地域のより異なるが、岩手県においてはリアス式海岸ということもあって、5 階建ての建物の高さまで及んだところもあった。東日本大震災による岩手県の死者は 5,897 名、行方不明者は現在 2,533 名に及んでおり、月命日の 11 日には、現在も捜索が続いている。また、避難者は最大 47 万人に及び、現在も多くの人々が仮設住宅で生活している。</p> <p>遠野市は岩手県のほぼ中央（内陸部）に位置し、盛岡市、花巻市、北上市、陸前高田市から宮古市への 4 つの国道が交差する交通の要衝で、人口は約 27,000 人の都市である。花崗岩地質で活断層がなく、地震に強い地域として研究者にも太鼓判を押されている。こうした特徴を生かし、東日本大震災以前に当時の市長が、「海のない、津波の来ない、遠野だからこそ、果たすべき役割がある」という考えから取り組んだのが、「後方支援拠点構想」であった。</p> <p>（２）東日本大震災発生と後方支援活動</p> <p>地震発生後、日没前の 16 時 30 分には市内の被害状況を把握することができた。停電、断水は数日続いたが、幸いにして市内での家屋倒壊、火災はなく、死者・重傷者はいなかった。市役所の本庁舎が全壊してしまい、駐車場にテントを設営して対策活動を開始した。</p>

12日未明（午前1時40分）に大槌町から2つの峠を越えて一人の男性が本部テントに駆け込んできた。大槌町では、大槌高校に500名が避難しており、水も食料も何もない状態のため、すぐに助けてほしいということであった。県からの指示を待つことなく、市長の判断で職員が物資を積んで大槌町に向かった。帰ってきた職員からの第一声は「言葉になりません」であった。そこから沿岸の釜石市、大船渡市、陸前高田市、山田町に対しても手探りで支援を拡大していった。支援隊の受け入れ、被災地への物資搬出、おにぎり隊の運営、ボランティア団体の宿泊場所調整、がれき撤去、保健師の派遣、文化財レスキュー等の後方支援活動を、役割・担当の枠を越えて、情報を共有しながらその場の判断で対応していった。さらに、この動きは市民にも広がり、被災者のために官民一体となった後方支援活動として展開された。これらの活動が可能だったのは、「速やかな市内の被害状況の把握」、「市民の理解」、「後方支援構想に基づく実践」だったことに拠ると思う。

### （3）最後に

すべての自主防災組織や消防団の方々をお願いしたいのは、非常時に何をすべきかということの日頃から考えて、実践的な活動を実施することを意識していただきたいということである。また、各地で発生する災害について、決して他人事と考えず、自分の地域に置き換えて考える癖をつけていただきたい。それが防災力を高めることにつながる。

また、現在被災地では、東日本大震災発生当時、まだ幼かった子どもたちが高校生となって、東日本大震災を見つめなおす様々な活動を行っている。ここ沖縄を含め、全国の若者が被災地の若者と交流し、東日本大震災について振り返っていただき、語り継いでいただくことも、有効な防災活動になると思う。



開催地より

豊富な写真や動画とともに、東日本大震災についての体験をお話いただき、遠野市の後方支援活動についてもわかりやすく説明していただいた。他人事ととらえずに、今日お話していただいたことを、自分たちに置き換えて考えていきたいと思う。